

計 報

中原与茂九郎先生を偲んで

前 川 和 也



わが国における古代メソポタミア研究の開拓者、京都大学名誉教授中原与茂九郎先生は、昭和63年3月27日、広島市西区己斐上の御自宅で逝去された。中原先生は明治33(1900)年4月16日のお生まれであり、かねがね先生は、三世紀を生きとおっしゃっておられたが、これはかなわぬ事となった。

中原先生は、大正8年岡山中学校、同11年第六高等学校、同14年京都帝国大学文学部をそれぞれ卒業された。京都帝国大学文学部副手を経て、先生は大正15年より大戦後まで、広島高等学校教授として教育・研究にあたられた。この間、昭和3年12月より5年1月までオックスフォード大学に留学されている。そして昭和24年より3年間、広島大学教授をつとめられたのち、26年より38年の御退官にいたるまで、京都大学教授として、御講義、御自身の研究にあたられた。その後、昭和47年まで立命館大学教授をもつとめられた。

中原先生は、昭和31年に誕生した「西南アジア研究会」の育成に、たえず御尽力下さった。本誌第1, 5, 10, 14号には御論文をお寄せいただいたし、御退官までの数年間は、研究会副会長の任をも果たされている。また先生は、昭和32年に京都大学文学部史学科内に開設された「西南アジア史コース」のために、連年アッシリア学関係の講義を担当された。

中原先生の最初の御著書 *The Sumerian Tablets in the Imperial University of Kyoto: Memoirs of the Research Department of the Toyo-Bunko No.3* (Tokyo, 1928) は、約50個のシュメール行政・経済文書の手写・翻字である。これこそは、わが国における楔形文書研究の生誕を世界に告げる記念碑であった。

先生は、全3千年におよぶ古代メソポタミア文明全般に深い洞察をはらわれた。このことは、『西南亜細亜の文化』（『岩波講座東洋思潮』、昭和4年）にすでによく示されており、この書は半世紀以上たった今日でも、その輝やきを失っていない。けれども、先生がもっとも深い関心をお寄せになったのは、古代メソポタミア史の最初期シュメール時代の社会・経済状況であった。先生は、シュメール行政・経済文書を駆使した御論文を多くお書

きになった。先生によってはじめて立証された事実(たとえばシュメールにおける折半小作制の存在), はじめて本格的にとりあげられた問題(たとえば土地売買文書のはらむ問題)なども多く, 御仕事はすこぶる高度なものであった。

京都大学御退官の頃より, 中原先生はシュメール都市国家成立期の文書(いわゆる古拙文書)の分析に力を注がれた。たとえば本誌14号(昭和40年)にお寄せになった「UET II 371文書の解説とその解釈—軍事的集団労働組織: 治水と王権の起源—」は, ウル古拙文書にみえる集団組織の分析をとおして, シュメール王権の成立過程を想定したものであった。この論文は, 先生が到達された峰の頂きの高さをよく示している。西欧学界においては, 古拙文書をこのように本格的にとりあげた研究は, まだ存在していなかった。

中原先生は古代メソポタミア研究者の育成に精力を注がれた。御努力は実り, 京都大学御退官のときにはすでに, 先生の御指導をうけた山本茂, 吉川守, 小野山節氏がそれぞれ, 歴史学, 言語学, 考古学の分野においてシュメール研究者として活躍されている。昭和48年には「シュメール研究会」が発足し, 中原先生は御逝去にいたるまで会長兼顧問をつとめられた。この研究会は, 先生に直接・間接の教えを受けた古代メソポタミア研究者の集まりであり, 昭和54年よりは, 研究会の欧文機関誌 *Acta Sumerologica* (ASJ) を年一回発行している。もちろん第一巻は, 先生への献呈論文集であった。*Acta Sumerologica* はたちまち, アッシリア学とりわけシュメール研究にかんする一流の国際学術誌との評価をうけるにいたった。先生のお播きになった種子が結実したのである。先生はこれからも, 日本における古代メソポタミア研究の進展をみまもって下さるであろう。いまは先生の御魂の永遠の平安をお祈りするばかりである。

御令息中原俊輔氏は, 先生御所蔵の洋書をすべて京都大学文学部西南アジア史研究室に御寄贈下さった。この「中原文庫」には, すこぶる貴重な研究書が多く含まれている。京都大学においてアッシリア学を学ぶわれわれ後進にとって, これらはどれほど支えになることであろうか。中原俊輔氏, 御遺族に厚く御礼申し上げる。